

とうきょう すくわくプログラム 活動報告書

2025年度
小学館アカデミー
アトレ大井町保育園

所在地：品川区大井1-1-1アトレ大井町2 3階

1. 活動のテーマ

- ・ 2歳児クラスでは、粘土あそびに興味があり日々の活動の中でも非常に集中して遊ぶ姿が見られていたため、他の興味や経験とつなげていくことで造形などの「表現」をより深め、作成したものに対してみてもらう事で喜びを感じる経験を重ねていく一連の流れを通して、より自らの思いや経験の表出を豊かにすることを目的とした。

2. テーマの設定理由

- ・ 2歳児クラスでは、粘土あそびに興味があり日々の活動の中でも非常に集中して遊ぶ姿が見られていたため、他の興味や経験とつなげていくことで造形などの「表現」をより深め、作成したものに対してみてもらう事で喜びを感じる経験を重ねていく一連の流れを通して、より自らの思いや経験の表出を豊かにすることを目的とした。

それらの目的に向けて、園周辺の地域資源を再度見直し経験につながる体験なども積極的に行っていった。

3. 活動スケジュール

●日々の遊びの中で表現を行う手法や、それらを培う基礎体験作りを年間を通して継続的に行っている

①自らの思いや、経験、興味のあること、好きな事を表現する手法を学べる取り組みや遊び

②粘土あそび

③自らの事を他者に伝える経験

④日々の活動や季節、行事から得る体験

・講師による保育実践、アドバイス（年間を通して：5月～3月）

3. 活動の為に準備した素材や道具、環境の設定

- ・ 記録用スマートフォン

- ・ ①から④の遊びに必要な玩具や教材

大型モニターテレビ・画用紙・かんてんねんど、季節を感じる素材

- ・ 講師による保育実践で活用した教材

図鑑・絵カード・DVD・タッチペン・ワークなど

◆子ども一人ひとりの気づきを大切にするため、また無理のない活動にするように3～4人の人数グループに分かれて行う。

◆身の回りの音を集中して聞くことができるように講師の知見を元に環境設定をする

◆子どもの興味をもとに構築した体験活動やそれを表現する場所や環境

4. 探究活動の実践

〈活動内容〉

- ① 少人数のグループに分かれつつ、それぞれ他者の前で名前や好きなもの等を言葉で表現し伝える。
- ② 粘土あそびは扱い方などの学びから入り、好きな形状を作成するために絵カードや図鑑を見ながらどう作成していったらいいのかを自由に取り組み、状況によって援助していく。
- ③ 海の生き物に強い興味を持っている傾向がみられたため、それらを表現につなげるため遠足で水族館を体験したり、日頃触れられる図鑑を環境設定としてより手に取りやすく設定したりした。絵カードも保育室内に掲示する等、日頃から「好きなもの×好きなもの」を実践できる環境を作った。
- ④ 水族館の体験を他クラスも交えた展示という形で園の行事にし、自ら作成した海の生き物を様々な人に見てもらう喜びを感じられるような取り組みを行う。
- ⑤ 戸外活動でも自然の中でお絵描きを行うなど、季節や身近な自然環境と表現をつなげられるような保育活動も行った。

活動中の子どもの姿・声
子ども同士や保育者との関わり

①園独自の探究活動での様子

- ・最初は「自分の事を伝える」という事を恥ずかしがっていた子どもたちも、無理をせず少しずつ日々の保育の中で経験を重ねると次第に堂々と話し、他者に伝えるようになっていった。
- ・次第に子どもたちから「○○ってきいてほしい！」とリクエストが出るようになり、他者に表現して伝える楽しさを感じるようになっていった。
- ・聞く側も、自分と同じことを言っている子がいると「○○っていつてたね、いっしょだね！」と保育者やお友達に伝え、他者の表現を受け止める姿が見られた。
- ・保育士は子どもたちが自発的に自らの事を表現できるよう、言葉でのやりとりを意識して行い、子どもからの発信をしっかり受け止めるようにした。

①園独自の探究活動での様子



○最初は照れていた子どもたちも、お友達同士でクラス活動を楽しみながら徐々に自らの表現が出来るようになり、他者から吸収しながら自己表現の幅が広がっていった。



○探究活動に集中して取り組む子どもたち



○表現の下地となる様々な体験や学びを探究活動から得ることが出来た。



②粘土による造形あそび

- 活動当初、子どもたち自ら「○○を作りたい」という思いを伝えてくれたが、どうやって作るのか、実際に形にするのはまだ難しい様子だったが保育士がフォローしていくことで楽しみながら実践できた。
- 保育士が「どんな形だろう？まる？さんかく？」「ちいさい？おおきい？」等、探索活動の中でも学んでいった数量や大きさ、形状等が意識できるように声をかけていき、繰り返していくことで子どもたちの中に徐々にイメージが膨らんでいくように関わっていった。
- 環境設定で興味に応じて「さかなのカード」を用意すると、「さめはある？」「くらげをつくりたい！」とどんどん作りたいものが明確化してくる様子が見られた。
- 粘土に触れることが苦手ではあるが、興味のある子どもには保育者が形を作ってみて、持ってみる、触れてみることから始めた。次第に抵抗もなくなり、他児と一緒にこねたり、ちぎったりすることを楽しむようになった。
- 継続して粘土による造形あそびを行っていった結果、表現技法の上達や道具への興味、色の変化等により飽きずに活動を続け、非常に繊細な表現を自ら考え実践できる様子も見られるようになった。

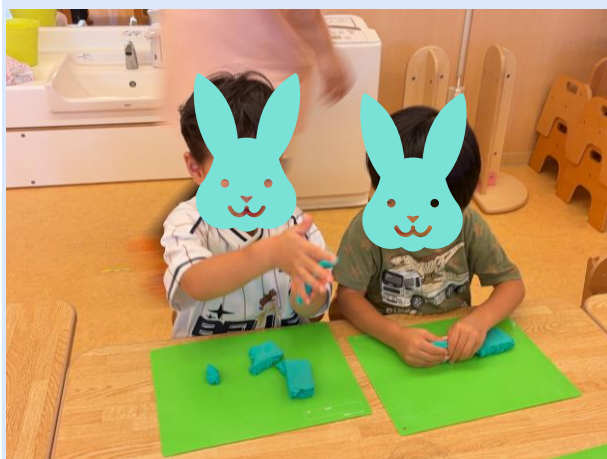
②粘土による造形あそび



○通年で年度による表現活動を楽しんだ



○次第に道具の使い方も巧みになり楽しみの幅が広がった



【粘土あそびの製作物「さかな」】



【粘土あそびの製作物「えだまめ」】

③水族館体験

- 海の生き物への興味から、近隣の水族館を訪問し、実際の魚や海の生き物を見てその思いや、発見、喜びや自らの知識を保育者やお友達に伝え、喜ぶ姿が見られた。
- 体験後も「みんなですいぞくかんいったね！」「さめがいたよね！」と体験を共有し合う会話を行う姿や、日々の遊びの中でもコンビカーに乗りながら「すいぞくかんにいこう！」と遊ぶ姿や、「すいぞくかんはこっちです！」とごっこ遊びが盛り上がる姿が見られた。
- 保育士はテラスの壁に魚のカードを貼り、ごっこ遊びの世界観がさらに広がっていくように環境を作っていた。

③水族館体験



【大好きな海の生き物を実際に見て、知っている生き物を見つけては真剣に観たり、喜んで教えてくれたりする子どもたち】

④水族館ごっこ（展示）

- 水族館ごっこの延長として、他クラスを誘って展示形式で水族館の再現を行ってみた。自分たちが粘土で作った海の生き物を展示し、各々のロッカーを使ってアクアギャラリーを作成した。
- 「○○ちゃんのはどれ？」「○○くんは何作ったの？」と友達や保育者と会話を楽しんでいた。また、他クラス（特に1歳児クラス）も2歳児クラスのアクアギャラリーに強い興味を持ち、一緒に作品を見て保育士に思いを共有している姿も見られた。
- 園児のみでの活動にとどまらず、降園時には保護者も水族館ごっこへ招待し、「○○くんのはこれだよ」等、自分の作品だけでなく全員で作り上げた水族館ごっこを喜んで紹介していた。

④水族館ごっこ（展示）



○水を表現した展示に興味を示す。

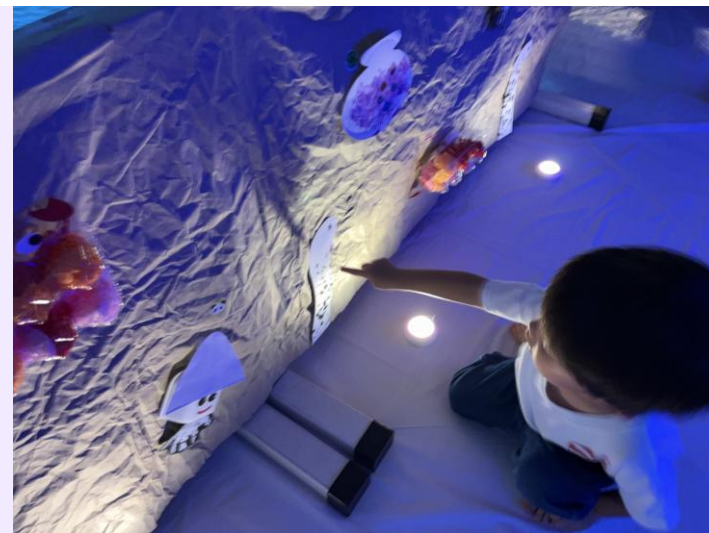


○2歳児の作成した魚をロッカーを水槽に見立てて展示した。

○触れるプールを模した寒天の感触あそびコーナー



○他クラスの制作も自らの経験と照らし合わせて興味を示す。



⑤季節や身近な自然環境と表現

- 秋に落ち葉や枝等の自然物に興味を持ち、遊びに取り入れる姿が見られるようになった。そこから、画用紙に落ち葉や枝を張り付けて“秋集め”を行った。
- 空を見上げた後、青のクレヨンで色をつけたり、クレヨンで拾った葉っぱを模写してみようとする姿が見られるなど、事由に表現することを楽しんでいった。
- 袋に風を集めたものを「もってかえってみんなにみせたい」と話し、走りながら集めた風を袋に入れて持ち帰った。廊下に飾り、他の先生や保護者に見てもらおうと、嬉しそうにしており非常に素敵な表現だと感じた。

⑤ 季節や身近な自然環境と表現



○空を見上げて描く色を決めている様子。

○秋の空気をたくさん集めて園に持ち帰った。



○葉っぱの色、形を自ら考え模写できた。

5. 振り返り 〈振り返りによって得た先生の気づき〉

※年間を通して継続的に行っている活動の振り返りは職員会議等の中で都度行っています。

(活動を進めていく中で 講師からのアドバイスによる振り返りによって得た気づき)

- 多少落ち着かなかったり、ふざけてしまうような中でも自らの表現を行おうとしている姿ととらえ遮ってしまわないようにすると良い。心を開き楽しく活動に参加していく中で得られることも多い。

→活動をスムーズに進めるという事を意識しすぎてしまった部分がある、多少落ち着きのない部分があっても見守っていくことで子どもたちの表現を新たな目線で見つけていける意識作りが出来た。

- 「昨日の事」を思い出して伝える経験もまた、自らの経験を表現していく上でとても大切。小さなことを思い出して話す、伝える経験がもっと大きな表現力につながっていくきっかけになる。

→日頃からより意識しながら、子どもとの対話を行っていきたい。

- 活動が終わった後、活動で経験したものを日々の保育の中で「紐づけていく」言葉がけが大切

→日々の中で、言葉がけが既に「答え」になってしまう場面が多かった。もっと「これさっきみたね、なんだっけ」と子どもから経験したものを表現するような言葉がけを意識していくことで、より育ちにつなげていく意識を持って行きたい。

- 先生達は何より一緒に楽しんで表現してくれることが、子どもたちの見本となりより楽しさを増してくれる。

→子どもたちを見守る意識が先立ってしまい、活動に保育士が主体的に関わる意識が薄くなってしまっていた。安全面での配慮はしっかりと行っていく上で、保育士自ら楽しんでお子さまと一緒に活動に参加していくことで育ちにつながる意識を持って行きたい。

5. 振り返り 〈振り返りによって得た先生の気づき〉

全体的な振り返り

- 年間を通して実践を行ってみて、興味の強かった「ねんど」と「さかな」を組み合わせ、水族館の体験などをさらに生かして水族館ごっこという展示表現の形に落とし込んでみることが出来た。それらの実践で終わらず、年度の終わりまで継続して表現活動を重ねていくことで、その時にはそこまではっきりとしたイメージの表現に至っていなかった子どもたちも、思い描いたものを自らの力でしっかりと表現する力が身についた。
- 他クラスに自らの経験を表現し、共有したことや、日頃の活動の中でも1歳児クラスが興味を示すなど、活動への興味の輪を広げていくことが出来た。
- 0歳児クラスには、いつもと違う環境として水族館ごっこの環境がすこし抵抗のある場になってしまったが、無理なく参加した。日常的に繰り返し参加できる内容であればもっと0歳児でも表現につながっていくことを今回の取り組みの中でも見つけていくことが出来るかもしれないと感じた。
- 表現活動が想像力をより豊かにし、自らの思いを伝える言葉等にも作用して育ちをはぐくむ部分もあったと感じる。常に子どもたちに接している保育者の言葉かけや共感、安易に答えに導かないことを意識していくのが大切だと改めて感じた。
- 園目標として「子どもの姿を出発点にする」を掲げ、既存の行事に縛られない取り組みが出来たことは今後の園が目指していく方向性として非常に大きく作用したと感じた。

※実践利用として導入した「寒天ねんど」が非常に取り扱いやすい点や、手が汚れづらい点で活動の合間に手軽に行えるため、表現活動の実施に対して非常に有用であった。また、感触が苦手な子どもも触れやすいのも非常に良かった。

※園独自の探究活動に使用するモニターを大型化したことで、子どもたちが見やすく以前より集中して取り組んでいる様子が見られた。

職員の振り返りや 保護者への報告の様子

